

(続紙 1)

京都大学	博士 (地球環境学)	氏名	Lilia Shahar Griffin
論文題目	The Recruitment System of Japanese Spiritual Communities: Environmentalism as a Fishing Hook (日本のスピリチュアルコミュニティの勧誘システム: 釣り針としての環境保護主義)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、日本における集団生活型のスピリチュアル共同体の1つである木の花ファミリーを対象とした質的研究である。長期間の参与観察、インタビュー、第一次資料を通じて収集したメンバーのナラティブを定性的に分析することにより、当該団体の新規メンバーのリクルート手法において環境主義的な言説・実践がどのように機能しているかを解明したものであり、全9章から構成される。</p> <p>第1章は序論であり、日本での新興宗教団体の興隆という文化的背景や宗教をめぐる近年の社会的状況を素描した上で、木の花ファミリーのリクルート手法において環境主義的な言説・実践がはたしている機能を解明するという研究目的を設定している。</p> <p>第2章は、本研究の理論的基礎を獲得するべく、先行研究の概観を行っている。まず、宗教団体への入信プロセスに関するロフランド＝スターク・モデルその他の研究と、日本での宗教団体の歴史・教義・教祖等を扱った研究を整理している。次に、環境主義的性格を備えた集団生活型の団体として、エコビレッジ・キブツ・スピリチュアル共同体を取り上げた後、西洋の環境主義思想であるディープ・エコロジーと社会エコロジーや、日本のスピリチュアル運動としての環境主義に目を移し、研究を概観している。</p> <p>第3章では、木の花ファミリーでのインタビューや会合の参与観察、各種資料の分析法などについて説明している。</p> <p>第4章は、当該団体の組織構造、各種活動、作業手順、役割分担、稼得方法、報奨制度などを詳細に報告している。</p> <p>第5章は、社会は自然の一部であり、自然が作動するのと同じ仕方で社会も作動するという当該団体の世界観を描出する。また、血縁関係が重要性をもたない大規模家族として全メンバーを捉える自己理解や、その疑似的家族構造を明らかにするとともに、この自己理解が楽曲・詩歌・絵画等でどのように表現されているかを説明している。</p> <p>第6章は、当該団体のスピリチュアルな側面を浮き彫りにしている。まず、指導者が語った、自らがスピリチュアルな権威をいかに獲得したか、神的存在とどのように意思疎通を行うのかなどに関するナラティブを報告している。次に、メンバーが神的存在をいかなる存在として認識しているか、それとの関係で自らの役割をどう理解しているかを説明する。最後に、スピリチュアリティと環境主義に関わる生活実践が記述される。</p> <p>第7章は、メンバーがどのように教育され、訪問者がそれにどのように参加してゆくかを明らかにしている。各種の集会の内容が詳述され、それらが教義との関係でもつ意味が指摘されている。</p> <p>第8章は、当該団体がいかなる仕方で社会全体や生物学的家族から区別され対比されているか、日本社会がどのように特徴づけられているか、日本人がどのような意味で他民族に優越していると想定されているかなどを説明している。</p> <p>第9章は考察と結論である。本事例ではロフランド＝スターク・モデルの7段階のうち3段階のみが見出されることや、ディープ・エコロジーおよび社会エコロジーとの類似点・相違点が観察されることについて考察している。その上で、当該団体のスピリチュアリティの下で、環境主義はリクルート手法として機能していると結論づけている。</p>			

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

日本において、環境主義的生活スタイルに対する一部の人々の関心が高まるにしたがい、集団生活を営む宗教的・精神的団体にとって、環境主義的な言説および実践が新規構成員のリクルート手法として有望となってきた。特に、1990年代のオウム真理教による地下鉄サリン事件を契機として、宗教的・精神的団体全般を危険視し敬遠する社会的傾向が強まったため、この種の団体にとって新たなリクルート手法の開発は喫緊の課題となった。個人の入信・回心メカニズムに関しては、欧米の諸事例について研究の蓄積がある一方で、戦後日本では多種多様な新興宗教や新新宗教が結成され存続してきたにもかかわらず、欧米とは大きく異なる社会的認知の下で宗教的・精神的団体が開発し実践してきたリクルート手法を社会科学的に解明することは、未開拓の課題となってきた。

本論文は、日本における集団生活型の精神的団体のなかでも比較的近年に結成された木の花ファミリーを対象とし、社会学で長年活用されてきたロフランド＝スターク・モデルを用いつつ、長期間の参与観察、インタビュー、第一次資料の分析を通じて、当該団体でのリクルート手法において環境主義的な言説・実践がいかに機能しているかを明らかにした質的事例研究である。その結果および意義は、以下の三点に要約される。

第一に、本論文は、非宗教的心性をもつ個人が多く、しかも近年には宗教への警戒心が以前よりも強い一方で、自然環境に根を下ろした生活スタイルへの関心が高まっているという日本の状況の下、木の花ファミリーがリクルート手法として環境主義をいかに活用しているかを明らかにしている。具体的には、有機農法を用いた自給自足生活の宣伝、農産物等の販売、農作業体験などを通じて、訪問者の関心を惹起し加入へと誘導するメカニズムが明らかにされている。あわせて、環境主義の標榜とは相容れない実践も報告されている。さらに、指導者・メンバーへのインタビューや集会で用いられる各種資料の収集・分析を通じて、当該団体の生活実践の詳細や、それを支える権力構造およびメンバーの意識が浮き彫りにされている。これらの理論的貢献には、小さからぬ学術的意義がある。

第二に、産業化を経た豊かな諸社会において、一部の市民に見られる環境主義的な価値観・生活スタイルへの関心が、拡大をめざす団体にとっていかなる効能を有するかを、本論文は詳らかにしている。環境主義が今日の産業化社会内の団体においてはたしている機能に関する本研究の結果には、地球環境学上の一定の意義を認めることができる。

第三に、本論文は、個人が有機農法などへの関心を端緒として、やがて団体の精神世界に没入し、指導者の全面的コントロールに服するにいたる没入プロセスを明らかにしている。このような研究結果は、精神的団体に限らず他の各種団体や学校・職場等における没入プロセスを防止するための示唆を与え、この点に社会的意義が認められる。

よって本論文は、博士（地球環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和4年2月3日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公開可能日：令和4年 3月 23日以降